

マリア 米国出身の元カトリック信者（上）： 生い立ち

:

明:
くべき が、マリアが神を信仰する引き金となり、いかに神を探し求めるかという明白なしるしとなります。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: マリア

日 23 Jun 2014

集日 23 Jun 2014



私の名前がマルヤム アル=マハディ ヤです。これは私のボ ンネ ムではなく、イスラ ム改宗の（1992年）に んだムスリム名です。私のボ ンネ ムであるキリスト教名は、マリア（アラビア ではマルヤム）です。私のイスラ ムへの改宗 を皆さんとシェアしたいと思います。イスラ ムへのよりよい理解を期待しつつ。

私の改宗 は、人生の区切りに分けて 成されます。

- ・クリスチャンとしての成 期（幼少期）
- ・背信（10代）

・真の探求（20代）

・始まり（30代）

・省（40代以降）

クリスチャンとしての成 期 幼少期

私はカトリックの に基づいて育てられました。カトリックの小学校ではカトリック教会の信条を学び、初 体 を受け、 人にちなんだカトリック ネ ムをもらいました。また 悔をし、カトリック信者として育つにあたっての全ての重要なステップをふみました。私は良い人物であるよう最善を尽くし（そうでない 合に神によってもたらされる をとても怖れていたため）、 にそうでしたし、それらの年月を通して相当な罪の意 を させました。私に教育を施した修道尼たちは 格で、私はなぜ「キリストの花嫁たち」として形容される彼女らが、いつも苛立ったり怒ったりしていたのか理解出来ませんでした。私は 年の夏休みには、南部に住む母方の家族を れていました。祖父は一 バプティストの神父を めていた程だったので、母はバプティストの と 境のもと育ちました（父がカトリックなので、母は 婚の にカトリック教会に改宗しなくてはなりませんでしたが）。そのため、南部に行った は教会とバイブル学校へ行き、アンティ ク オルガンを んでキリスト教の 美歌を歌いました。叔母が演奏し、私と 兄弟が一 に 持ちを めて歌ったものでした。それはいい思い出でしたし、当 のキリスト教的な教育は しい、快 なものでした。こうして年月が ちました。学期中は 家で ごし、夏休みを南部で ごしていました。私の宗教的生活は二重の人生でした。当 を思い起こすと、カトリックとバプティストの の の唯一の共通点は、イエス（彼に平安あれ）に する基 だけでした。それ以外については、2つの なった世界でした。

背信 10代

私の少女 代は容易ではありませんでした。家族 の酷さから、それはある日、神は存在しない（あるいは、最低でも神が存在したとしても、私のためには何もしてくれない

)という にした程でした。その日、私は夜にベッドに横たわり、そうした 感と共に目を ましたことを えています。突然、巨大な空虚さが私を いましたが、それが真 なのであれば、それを受け入れなければならないと私は自分に言い かせました。当 の理解力では、それが私にとっての真 だったのです。10代 半になると、私は探求を始めました。その当 、家族は宗教の 践をほぼ完全に放 するようになっており、私は教会に行くことが求められていなかったため、自 的に真 の探求をしようと 意しました。私はイエス (彼に平安あれ) について んだのを えています。彼には い感情を持っていましたし、彼とのある のつながりさえ感じていました。しかしながら、私は彼の死に方だけはどうしても受け入れることが出来なかったのです (彼ほど神に近い人物が、どうしてあのような死に を迎えるというのでしょうか?)。それは、 明すら出来ない程の悲 として映りました。それゆえ、私はイエスが 存した人 であり、 にこの地球上で生き、非常に特 な使命を携えた非常に特 な人物であるという 人的な 解と信条に至ったものの、それ以上のことは何も分かりませんでした。つじつまの合わないことが多すぎたことから、私は徐々にキリスト教の概念そのものをあきらめてしまっていました。

真 の探求 20代

20代になると、私は心と魂の不安定さを解消するために、真 を 出すことに多大なる必要性を感じていました。ある 会から 教を 介され、それは私の求めていたことに非常に近く感じられた (少なくともそこには明 な 理があった) ため、入信することにしました。多くの部分においてそれは私の助けとなったものの、依然として何かが欠乏して いました (が、当 はそれが何かは分かりませんでした)。数年 には、私は 教からも ざかるようになりまし。それは人生における安 というよりは重荷となってしまっていました。その当 、私は仕事でエジプトに び、そこで夫に出会いましたが、彼はムスリム の中で育った人物でした。当 はまだ 教に携わっていたため、私は彼を改宗させようと みました。彼は忍耐 く私の主 に耳を けていたため、私は自分の布教が成功すると 信じた程でしたが、今になって思うと、彼は して改宗したりはしなかつただろうと 信じています。

始まり 30代

それから私は 教の 践に居心地の さを感じるようになり、エジプトに行って 婚した、身 米国に り、その 再びエジプトに って夫と暮らしはじめました。私たちはそこで一年 を ございましたが、それは きの と しをもたらず、忘れられない一年 でした。その、私の年 は30代の前半に差し かっていました。エジプトで本格的に 婚生活を始める前までは、 限界までストレスを感じ、死ぬのではないかと感じた程でした。というのも、一年以 上に渡って夫と れ れだったのです（私の仕事が私を米国に拘束し、その他の が彼をエ ジプトに引き留めていました）。その期、私たちは を取り合ってはいましたが、それ は彼と共に自分の一部も失ったかのように、非常に困 でストレスの溜まるものでした 。私は人から拒食症患者のように えると言われました。そのことには、ある日タクシ のバックミラ でふと自分を たときまで 付きませんでした。私の首元からは 骨がくつき りと浮かび上がっていました。始めはそれが自分だとは思わず、それに 付きかなりの ショックを受けました。私は新たな 点から自分を つめ直しました。手は骨のようにほ っそりとしており、自分自身が骸骨のように え始めました。その当、夫は物静かに、 そして忍耐 く、私にイスラ ムについてではなく、神を信じることについて 明していた でした。彼は、私が神を信じている限りは、私がどの宗教を 践しようが わないと言い ました。私は何度も何度も神は存在しないと口 し（ 教はそうした信条を支持します） 、彼は何度も何度も神は存在すること、そしてそのしるしと神の性 についての 明を り 返しました。彼は神が（その知、 、その他の性 を通して）私と共にあることを 明し 、イスラ ムの 点から神について し、一 して神を信じさえすれば、私はムスリムになら なくて良いことを しました。 固な性格の私は、表向きはそれに抵抗を示してしま したが、内 では小さな希望の が き始めていたのです。

夫は私にイスラ ムの本を届けるよう、彼の友人に んでいました。私は依然として神に ついての をくことには には なに 味を持っていなかったもので、彼がそうしたことに きま した。それで彼はクルア ンの英 と、イスラ ムの概 本を置いて行きました。ほんの少し だけ 味をそそられはしましたが、私はそれらを しました。私は本を へ置きやり、眠り につきました。その夜、私は を ました。その のなかで、私は かしい白い光に包まれて いました。 くから、クルア ンの朗 のような美しい音 が こえてきました。私の背 には黄

金の螺旋 段がありました。これらのイメ ジはすべて、不思議な白い光の中で停止していました。この光は、私が 世界で たことのあるいかなるものよりも明るいものでしたが、それは私の目を痛めたりはしませんでした。それは かな、天からの光でした。それから下に目をやると、私は自分が全身にムスリムの着るような白くて美しいドレスとヴェールをまとっていることに が付きました。その 、私は白い光と、内 から きでてくるとてもない幸福感によって たされてきました。私の正面の左 には5 6 の子供がおり、前を向いていたために を ることは出来ず、その子の性 も分かりませんでした。私の子であることを直感しました（当 、私は身体的に子供をもうけることが出来ませんでした）。この は、私の根底を るがしました。それは7年前でしたが、私は未だにその を 明に思い出すことが出来ます。 から めると、その重要性に 付いていなかった私は、それが の中に 明に き付いていたため、そして意味が分からなかったため、そのことを夫にりました。私はそのような を たことはそれまで一度もありませんでした。それについて り えると、夫はこう言いました。「これは、すべてのムスリムが一度は てみたいというような なんだよ。」でも、なぜ私なのでしょう？

私は神を信じず、神の存在を（には感情的に）否定し、イスラ ムはおろかムスリムになることに 味すら抱いてもいませんでした。彼によると、神は私に何かを教えてくれているのであり、私は非常に幸 なのであるということでした。そのことは私を かせました。（味深いことに、この は私にとって非 的な性 を持たず、将来を ているかのような感 を与えました。）この の 、私はイスラ ムに する本を手に取り、この宗教について多くのことを することになるのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/1171>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。